

心の栄養剤No102「日本のこころの教育」

昭和の初め頃、小林多喜二という人がいました。作家で皆さん小説を読んだ方がいらっしゃると思いますが「蟹工船」という小説を書いた作家です。蟹工船という小説はですね、蟹工船つまり蟹の缶詰を作る船ですね船の中で働いてる女性たちがもう本当に低賃金でお金をそんなにもらわないで、そして労働が激しい。その様子を小林多喜二は、あまりにも可愛そうだからと書きました。ところが何か国を批判したと何かで、とんでもないことになって小林多喜二は警察に捕らえられてしまいました。

築地署、東京の築地署というところの監獄に入ってしまった。ほかにも何かあったのでしょけど、とにかくそれが理由で彼は監獄に入りました。頭は剃られ、いつも竹刀で打たれ大変毎日毎日苦しい生活を強いられました。ところが小林多喜二を指導していた憲兵・警察の人が「もうそろそろ命がこいつは無いだろう、もうすぐ死んでしまうのだから最後にお母さんだけ面会を許そうではないか」という事になりました。お母さんは北海道の小樽です。当時は2月で雪が寒む寒むと降りしきる小樽でお母さんは一人で生活をしていました。お父さんはいないのです。一人息子の小林多喜二は東京の築地署に連れて行かれお母さんは一人で雪の中で生活をしていました。そこへ築地署から一枚の手紙がやってきました。

「3日後11時から5分間面会を許す、5分でよかったら出頭しなさい」という手紙をもらいました。多喜二のお母さんは、この手紙をもらったとたんにも「ああ多喜二に会える」五分間でも1分でもいい一目だけでも多喜二に逢いたい。ところがお金が全然無いんですね～それから雪の中を駆けずり回って、その手紙を一枚持って多喜二に会えるんだからどうか行きかえりの汽車賃だけ貸してくださいと。そしてやっとのことで東京に行って帰れるだけの汽車賃を借りることができました。

その晩に雪の小樽を出発します。一人で今みたいに新幹線があるとか連絡船が便利だとかないんです、全部各駅停車ですから雪が降ると止まってしまうんですから、そうするとですね雪の中をお母さんはホームに飛び出して駅長さんに前の駅に汽車が止まっているか聞き、駅長さんが電話で確認して「おばあちゃん前の駅に汽車が止まっているよ」というと、雪の降る線路の中を真夜中に一人で歩き出したんです。みんなで「お母さんだめだよこんな真っ暗ななか一人で行けないよ」と言っても「多喜二に会えないから、11時1分過ぎてももうダメだから、多喜二に会えないから」といって雪の中を一駅一駅つないだっていうんですから、そうしてやっとのことで10時半に東京の築地署に着きました。

何も飲まず喰わずです。さあその姿を見た警察官・憲兵は、あまりにの酷さに同情したんですね、そうして練炭火鉢を持って行って「お母さん寒いでしょうあたりなさいよ」と、そうしたらお母さんが「**いや多喜二はあたってないからいい**」と言ってせっかくのその小さな練炭火鉢を面会所の脇へ置いてしまいます。それから今度は、その警官が朝食で食べ残したうどんを温めて「お母さん何も食べてないんでしょ食べなさい」って言ったら「**多喜二は食べてないからいいです**」と言って、そのうどんも練炭火鉢の横に置いてしまいました。そうしてひたすら鉄格子にすがって多喜二が来るのを待っていました。11時ぴったりに多喜二が憲兵に連れられてきました。お母さんの顔を見るなり多喜二は「お母さんごめんなさい」と言ったきり、わあ～と泣いてコンクリートに額をつけて上げない。

お母さんも着いたとたんにごめんなさいと頭をさげたから多喜二がどうかかわからない。頭は剃ってるし目はさけ口はさけてるしの状態でしたから、そうしてたった5分の面会が1分たち2分たち3分たったときに憲兵が飛んできました「お母さんあと2分ですよ、なんか言ってやって下さい」と、そうして二人の警官と刑事が多喜二の耳をもって、「こらお母さんだ見ろ」と、顔をくっと上げました。

その多喜二の顔を見てお母さんがなんと言ったと思いますか？「多喜二かぁ？」と言ったんです。「多喜二かぁ？」と2回言ったんです。自分の子供がどうかかわからない、顔が変わってしまってる。そしたら多喜二が「はい多喜二です」と言います。

そうしたら後残った1分30秒、多喜二のお母さんは何と言ったと思いますか？鉄格子にすがりながら「**多喜二お前の書いたものは間違っておらんぞ**」多喜二は間違っていたから逮捕されているのです。多喜二のお母さんは文字が読めないんですよ。一行も多喜二の小説は読んだことがない。しかも憲兵警察が悪者として捕らえられているんです。しかし多喜二のお母さんは「**お前の書いたものは間違っとらん。お母さんはお前を信じとるよ**」この言葉を残った時間1分数秒言い続けて雪の小樽へ帰りました

多喜二は、その三週間後にこの世を去ります。最後に憲兵が竹刀を振り上げて打とうとした時に、しきりに右手を上げて震えてる、なんか言いたいただでも言葉にならない。そこで他の人が水を持って「一杯飲んで言いたいことがあったら言え」と言いました。そうしたら多喜二がその一杯のコップの水をぐーっと飲み干して「待ってください待ってください。私はもうあなたの竹刀を受けなくても死にます。あなた方はこの3ヶ月私を地獄へ落とそう地獄へ落とそうと私をたたき、私をののしってきたけれども、わたしは決して地獄へは落ちません。なぜならば昔から**母に信じられた男、母に信じられた子供は必ず天国へいくという言い伝えがあります**。私のお母さんはわざわざ5分間の面会のために雪の中を小樽から東京までやってきて、文字が読めない私の小説を一行も読んでいない母親が、おまえを信じてくれると私を信じてくれると、私はどんなことがあっても天国へいきます」と言い残してぱたっと命を落とします。

みなさんお母さんの愛は偉大です。お母さんの愛は無条件です。子供が悪くてもお母さんだけは信じてる。小林多喜二はその他のところで「僕の母は僕の太陽だった」と書いているんです。素晴らしいことですね。わたしたちは今こうやって生きてますけどね、この命は36億年も前からずっと続いているんですよ。**私達の身体をそうやって何十億年産み続けてきたから僕達がいるんですよ。お母さんという役目はすごいんです。**

君達の個人的なお母さんだけでなく、**ずーと命を続けてきたお母さん（女性）に感謝の気持ちを常に持たないといけない**と思うんです！！

「日本のこころの教育」講演録より

年末に友人より「是非、聞いてみて!!」と送ってもらった境野勝悟さんの講演CDの中に出てきた話で、久々にCD聞きながら感動して泣きました!!

妻に「このお母さんと同じ立場だったら同じことする?」と聞いたら、即答で「もちろん!!当たり前!!」「きっと世の中のお母さん皆同じじゃない!!」と答えました!!

最近、世の中では母親による虐待や放置の悲惨なニュースがありますが、99.99%のお母さんは、きっと多喜二のお母さんと同じだと思います!!

そのことを踏まえ私達男には、どうゆう役目があり〜どう生きなければと、しっかり考えておかないといけないと思います!!
頑張りましょう!!

